



を振り返り評価させた。具体的には好感度、有用性などについて尋ねた。

## 2 先行研究

英語活動についての評価に関する先行研究は、アセスメントや意識調査により英語活動の効果を分析し、英語活動を評価した研究と、英語活動を経験した生徒に英語活動を振り返り評価させ、その結果から英語活動を評価しようとした研究の2タイプがある。それぞれについて以下に詳しく述べる。

### 2.1 効果から英語活動の評価を試みた先行研究

英語活動の効果から英語活動の評価を試みた先行研究では、効果は「英語力」と「情意面」から分析されている。したがってそれらの先行研究のほとんどは、小学校で英語を学習または経験した中学生や高校生、大学生（以下 Ex と記す）と、小学校で英語を学習または経験しなかった中学生や高校生、大学生（以下 Non-Ex と記す）の「英語力」や「情意面」を、調査時点でグループ間比較し、その結果から「効果あり」、「効果なし」と結論している。英語活動の効果から英語活動の評価を試みた先行研究を表1「効果あり」、表2「効果なし」にまとめた。

一般に英語活動の効果として「情意面」での効果が認識されており、小学校の公開授業に足を運ぶと、「児童の英語活動に対する意欲が高まった」、「ALTと積極的にコミュニケーションしようとする」、「英語に興味を持ってきた」などと英語活動の効果が述べられる場面にしばしば出会う。授業観察や児童による振り返りカード、学校独自のアンケート結果から導かれた所見であろう。先行研究の中には、この一般的な認識をデータによって分析した研究がある。表1の4、12、13、14と表2の12、13である。表1の4は、英語活動の必修化決定まで続いた英語活動の必修化の是非を問う論争の中で、「肯定派」を支持してきた代表的な研究である。しかし、この調査の参加者は英語活動ではなく、小学校時代の早期英語教育（英会話学校や塾を含む）の経験者であり、この研究結果をそのまま英語活動の効果として解釈することには、若干の疑問は残る。しかし、「情意面の効果」という一般的な印象を大規模な調査に

より裏付けた意義は大きい。表2の12と13では情意面での一応の効果が実証されているものの、結論として Takagi（筆者）は「文部科学省が期待しているような情意面での効果は確認できなかった」と研究を結んでいるので、表2に分類した。

「英語力」の効果に関する先行研究を概観すると、「効果がある」と結論付ける研究と「効果がない」と結論付ける研究に分かれており、一貫した結論は得られていない。その背景には調査参加者のプロフィール、サンプル数の違い、アセスメント方法、調査時期の違いなどがある。「英語力」に関するアセスメントの項目を設定しても、それをどのような方法でアセスメントするかが大変難しい（バトラー, 2005; Cameron, 2001）ことも一因となっている。また、英語活動が本格的に実施されるようになったのは最近であることから、表1や表2の参加者は私立小や大学附属小出身者が多く、公立小学校での英語活動そのものの効果を調査した研究は限られている。したがって、従来、英語活動の効果については不明瞭な部分が多かったと言える。そこで、先行研究の中には Ex と Non-Ex 間の比較から効果の有無を結論付けるのではなく、Ex のみの英語力を調査し、Ex の英語力がある一定の水準に達していたことから「効果あり」と結論した研究がある（表1の1、2、7）。1、2は児童英検をアセスメントに使用した研究で、サンプルも6,541名、5,087名と多いが、7では37名に限られている。表2の10も Ex のみを調査しているが、Ex の中でも個人差があることから、高田（2005a）は英語活動が一律にプラス効果を与えるわけではなく「効果なし」と結び、表2に含まれている。

表1、表2の先行研究を概観すると、「効果なし」と結論付ける研究が多かったが、昨年「英語活動の効果」を実証した表1の6や13の研究結果が報告され、流れが一転したようである。これら2つの研究は、公立小学校で英語活動を経験したサンプルで構成されており、調査の結果「情意面」と「英語力」両面での Ex の優位性が確認されている。英語力ではリスニングやスピーキングでの効果が確認され、情意面での効果も報告されていることから、文部科学省が英語活動の目的とする「音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地」（文部科学省, 2008c）が英語活動によりはぐくまれていることを実証していると解釈される。

表1：小学校での英語指導は効果ありと結論付けた研究

番号	研究者	調査対象	調査項目	結果の概要
1	バトラー・武内 (2006a)	Exのみ。全国28校(私立4校を含む)の小学生6,541名。小3(697名),小4(1,666名),小5(2,337名),小6(1,814名),学年不明27名。	児童英検シルバーのスコアによる英語運用力と学年や指導形態,児童の英語活動や自己評価,動機などの諸変量とシルバーでのパフォーマンスの関係。	参加者のシルバーのスコアは全体として70%で,学年が上がるにつれて得点も上昇していた。
2	バトラー・武内 (2006b)	Exのみ。全国30校(私立4校を含む)の小学生5,087名。小1(6名),小2(11名),小3(254名),小4(575名),小5(2,299名),小6(1,932名),学年不明10名。	基礎的コミュニケーション能力(リスニングのみ)と活動の頻度や活動形態による違い,アセスメントへの児童の評価。	参加者のブロンズのスコアは全体として83%で,学年が上がるにつれて得点も上昇していたが,学年よりも総授業時間数の方がスコアへの影響が高かった。
3	中央教育研究所 (2002)	公立小3~6年生,818名。ExとNon-Exで構成されているが,Exの中には学外で学習しているものも含まれる。	語彙的能力 音韻認識能力 単語認識能力 会話聞き取り能力	左記の能力のいずれにおいても,ExはNon-Exよりも有意に優れていた。(ただしこの研究でのExは公立小学生であるが,塾で英語を習っている児童が45.8%含まれている。)
4	樋口他 (1994)	1,417名。私立小学校や私塾での1年間以上英語学習経験を持つ中・高・大学生(Ex)645名,Non-Ex中・高・大学生772名。	情意面(英語学習に対する態度と動機,学習意欲,異文化への態度・関心,自国文化の考え方への影響)	小学校時代の早期英語教育は,外国語の学習意欲を高め,積極的な異文化理解の態度を育成する上で,非常に大きな役割をする。
5	樋口他 (1986, 1987, 1988, 1989)	総合計849名。リスニングとリーディング:私立中・高生573名,スピーキングは私立中・高生144名,ライティングは私立中・高生132名。ExとNon-Exで構成されていた。Exはいずれも私立小学校で教科として英語を6年間学習。	リスニング力 スピーキング力 リーディング力 ライティング力	発音に関して,中・高を通じて,平均点でExがNon-Exより優れている(有意差はなし)。語彙,文法は中1ではExがNon-Exより優れているが,その差は中3でほとんどなくなり,その後も差はない。運用力は中1ではExがNon-Exより優れているが,その差は中3でほとんどなくなり,高2段階で再びExがNon-Exを引き離す。
6	樋口他 (2007)	情意面の調査参加者は小6生(59名),中1生(82名),中2生(68名),いずれもExとNon-Exで構成されている。スキル面の調査参加者は小6生(58名),中1生(97名),中2生(79名),いずれもExとNon-Exで構成されている。	情意面 スキル面 リスニング スピーキング リーディング	小6生で情意面におけるExの優位性が確認されたが,その優位性は中1でほとんどなくなり,中2生で再びExの優位性が少し確認された。スキル面では中1生のリスニングとスピーキング,中2生のスピーキングでExがNon-Exよりも優れていた。

番号	研究者	調査対象	調査項目	結果の概要
7	石濱 (2003)	Exのみ, 小学生37名, 事前・中間調査時点では5年生, 事後調査時点では6年生。	聴解力テスト(児童英検問題集)	クラブ活動での英語学習により, 学習時間の増加に伴い子供の聴解力が伸びた。
8	勝山・西垣・汪 (2006)	2校の小学生(1~6年生)。英語導入校(Ex)と未導入校(Non-Ex)を比較。第1回調査: Ex 369名とNon-Ex 178名, 第2回調査: Ex 431名とNon-Ex 488名)	英語力(児童英検練習用問題集)	ExはNon-Exよりも平均点があり高く, 推定される英語接触量が増すにつれ, 平均点があり高くなっていった。また学年が上がるにつれ得点が上昇していた。
9	松川 (1998)	中1生152名, Ex 65名(研究開発校)とNon-Ex (87名)。	英語運用能力(迅速さ・正確さ・流ちょうさ, 文法的観点, 発話量)	Exは質問にも迅速に対応し, 正確さ, 流ちょうさのいずれも, Non-Exに勝っていた。文法的観点では両グループにあまり差が見られない。発話量では, 単語数・文数でExがNon-Exに勝っていた。
10	恵・横川・三浦 (1996)	リスニングテスト: 中2生69名, 中3生62名, 高1生144名。リーディングテスト: 中2生69名, 中3生76名, 高1生64名。ExとNon-Exで構成されている。	リスニングカ リーディングカ	リスニング力はいずれの学年においてもExはNon-Exより有意に優れていたが, リーディングでは有意差はなかった。各学年とも習熟度はExがNon-Exより高く, 逆転現象は見られなかった。
11	恵・横川・三浦 (1997)	私立高校3年生24名。Ex 10名とNon-Ex 14名。	語彙性判断課題 文法性判断課題 統語/意味	オンラインで課題を行い, 判断時間を計測, グループ間で比較した。いずれの課題においてもNon-ExはExよりも判断に時間がかかる傾向が見られた。
12	三尾・橋堂 (2004)	中学1, 2, 3年生計273名。ExとNon-Exで構成されている。	情意面(英語学習に対する態度と動機, 学習意欲, 異文化への態度・関心, 自国文化の考え方への影響)	アンケート結果から異文化理解や国際理解の分野で, ExはNon-Exより優れていた。
13	静 (2007)	長野高校1年生217名と2年生221名, 3年生223名の合計661名。ExとNon-Exで構成されている。	情意面(動機付け)とスキル(英語総合力, リスニング力, リーディング力, 語彙力, 文法力)	ACEテストとアンケート調査の結果, 情意面(動機付け), スキル(総合的英語力, リスニング力)はExの方がNon-Exより有意に高い。また学習年数が増すとより顕著に効果が現れることが確認された。
14	Watanabe (2007)	中学3年生。 Ex 70名とNon-Ex 70名。	情意面	クラス観察, NRT(全国標準学力検査), 情意面でのアンケートの結果から, ExはNon-Exに比べて英語学習に対する不安が少なく, ネガティブな感情なしに中学校で英語を学習していた。

■表2：小学校での英語指導は効果なしと結論付けた研究

番号	研究者	調査対象	調査項目	結果の概要
1	Kajiro (2005)	中1生149名, 93名は付属小出身者(Ex), 56名は他の小学校出身者(Non-Ex)。	英語の構音能力	小学校で英語の授業を8か月間, 週1回受けただけでは, 音読時の発音力に有意な差は確認できなかった。
2	神白, 太田 (2005)	国立大付属中学生161名で, ExとNon-Exで構成されている。	全般的な英語力, CASEC(中2の12月, 中3の6月と12月)	全体的に見ると, ExとNon-Ex間に有意差はないが, Exの上位20名とNon-Exの上位20名の比較では有意差がある。Ex全員が優れているわけではなく, Non-ExでもExと同レベルの到達度に至る者がいた。
3	Kajiro (2007)	国立大付属中学生148名。ExとNon-Exで構成されている。	発音スキル	ExとのNon-Exのインタビュー, アンケート調査, CASECスコアを比較したところ, 早期英語による発音の優位性は認められなかった。しかし, 英語力の上位集団(CASEC350程度)ではExはNon-Exよりも発音が優れていた。
4	金谷・太田・神白 (2005)	国立大附属中2年生10名。Ex5名とNon-Ex5名で構成されている。	会話力, 態度	1人2分のインタビューを録画したビデオから45名の日本人英語教師にExとNon-Exを判別してもらったところ, 識別は難しかった。
5	Shinohara (1999)	私立高生116名。私立小学校で英語教育を受けたExと私立中学入学後英語学習を始めたNon-Ex。	発音	リズム/ストレスと母音/子音の領域でグループ間に有意差があった。しかし, Exの優位性は時間がたつにつれて薄れる。早期英語教育を行っても, 小・中・高一貫した教育目標がなければ, 効果は保持できない。
6	白畑 (2002)	実験1は中1生で研究開発校出身者(Ex)115名と一般小学校出身者(Non-Ex)122名。実験2と3はEx20名とNon-Ex20名。	実験1. 音素識別能力 実験2. 英語発音能力 実験3. 発話語数	音素識別能力テストの結果ExとNon-Exで音素識別能力に有意差はなかった。英語発音能力については, ALT5名に審査してもらった結果, 差が見られなかった。発話語数もカセットテープに録音したものを数えたところ, 両グループに差がなかった。
7	白畑 (2004, 2007)	高校生20名。Ex10名は私立小3～6で210時間の英語の授業を受けた。Non-Ex10名。	文法力	小学校時代に200時間を超える英語学習をしたとしても, 高校3年生の時点での文法の習熟度に関しては, 特に効果が出ていない。

番号	研究者	調査対象	調査項目	結果の概要
8	高田 (2003)	私立中 1 年生 93 名。付属小出身者 (Ex) 43 名とそれ以外 (Non-Ex) 50 名。	音読, 語彙, 文法運用	1 学期は Ex が Non-Ex よりも音読のみ優れていたが, 語彙, 文法において両グループに有意差はなかった。3 学期には, すべてにおいて両グループに差はなかった。
9	Takada (2004)	私立中 1 年生 90 名。付属小出身者 (Ex) 41 名とそれ以外 (Non-Ex) 49 名。	聞き取り力	中 1 の 7 月 は Ex と Non-Ex 間にリスニングテストの結果有意差はなかったが, 中 2 の 4 月には Non-Ex が Ex よりも優れていた。
10	高田 (2005a)	附属小学校で小 4 から英語の授業を受けた私立中 1 年生 12 名。	単語の意味, 構文, 文法の理解度とそれらの運用力	暗写テストの結果から, Ex の中の文法力に個人差が確認された。音声重視の小学校英語学習は一律にプラス効果を与えるわけではない。
11	Takada (2005b)	私立中 1 年生 93 名。小学校で読み書きの指導を受けた Ex 43 名と Non-Ex 50 名。	音読パフォーマンス	中 1 の 7 月 では Ex は Non-Ex よりも優れていたが, 3 月の時点では有意差がなかった。
12	Takagi (2003a)	中学生, 高校生, 大学生の計 1,610 名, Ex と Non-Ex から構成されている。	情意面 (動機, 不安, 態度, 努力, 期待)	情意面に関してアンケート調査を行った結果, 中学生では小学校英語の効果がいくぶん観察できたが, 高校生や大学生では観察できなかった。
13	Takagi (2003b)	957 名の中学生。Ex 753 名と Non-Ex 204 名。	情意面 (動機, 不安, 態度, 努力, 期待)	情意面についての意識調査の結果, Ex と Non-Ex のグループ間で有意差が確認されたのは道具的動機付けと外的動機付けのみで, その他では有意差はなかった。文部科学省が期待しているような情意面での効果は確認できなかった。
14	筑波大学附属中学校研究部 (2004)	附属中 1 年生 204 名。Non-Ex と Ex で構成されている。	音素識別能力 授業理解度 英語技能力	中間考査と面接テストで有意差が認められたが, 音素識別テストでは有意差はなかった。小学校での英語経験は, 中学校での学習にあまり大きな影響を与えない。
15	山森 (2004)	中 1 生 81 名, Ex は 26 名で Non-Ex は 55 名。	学習意欲	有意差はなかった。小学校での英語の学習経験の有無は, 中学校での英語学習開始時の学習意欲には影響しない。

これら2つの研究により、効果の側面から英語活動の評価を試みようとした研究が集大成されたと言えるのではないだろうか。

## 2.2 Exによる評価から英語活動の評価を試みた先行研究

表1, 2のように英語活動の効果から英語活動の評価を試みた先行研究に加えて, Exに英語活動を振り返らせ評価させた結果に基づいて英語活動の評価しようとした研究がある。しかし後者の研究は, 前者に比べ研究の数が限られている。北條・松崎(2003)は, Ex 64名(中1)に英語活動の好感度, 有用性, 必要性, 効果について意識調査したが, 調査参加者は英語活動をどちらかという否定的に評価しており, この結果を北條・松崎(2003)は, 調査参加者が経験した英語活動の時間数の少なさ(年間2時間)によるのではないかと推測している。北條・松崎(2005)は, 小学校で年間10時間の英語活動を経験したEx 687名(中1が468名と中2が219名)に英語活動の評価させた結果, 話すこと, 発音, 文化理解の面での英語活動の有用性が確認されるものの, 有用性は学年が上がるにつれ薄れていき, 中1生では英語活動の良い印象が残っていたが2年生になると印象がかなり薄れていると報告している。橋口(2006)は中1生Ex 116名(3つの小学校からの進学者)を対象に英語活動の違いによって, Exの英語活動への評価が異なるかどうかを調査した。その結果, 他校に比べパイオニア校出身者が英語活動に対して否定的な評価をしていることから, 英語活動の違いが英語活動の評価に影響することを明らかにした。橋本(2005)は, 68名の中1生Exに英語活動に対する印象を尋ねたが, 全体的には好印象を持っているにもかかわらず, 中1生の15%は否定的な印象を持っていたと報告している。高松(2002)は, スピーキングにおける英語活動の効果をEx 24名に評価させた結果, Exの多くがその効果を認めていると報告した。阿部(2007)は, Exの中1生195名と中2生197名に英語活動の有用性を尋ね, 肯定的な回答を示したのは中1生で39%, 中2生で28%であったと報告している。

先行研究を概観すると, Exは英語活動をあまり高く評価していない傾向があり, また, 学年が上がると英語活動への評価が低下する傾向が浮かび上がる。しかし効果の面から英語活動の評価しようとし

た研究に比べ, この分野での先行研究が限られているので, これらの傾向を一般化するためにはさらに調査が必要である。また, いずれの先行研究も1回の調査に基づく結果であり, 同一対象者を2度にわたって調査した研究は, (筆者の知る限り)行われていない。同一対象者を追跡調査することで, 英語活動の評価がどう変化するか, 中学校での英語の学習の進捗が英語活動の評価にどのように影響を与えるかが検証可能となる。さらに, 英語活動の指導内容, 指導方法, 取り組みの違いによる英語活動に対する評価への影響が予想されるが, 先行研究の中で影響について検証したのは, (筆者の知る限り)橋口(2006)だけであり, この傾向が一般的であるかどうかを検証するためには, さらに調査が必要であると考えられる。

## 3 本研究

### 3.1 目的

本研究では, Exが英語活動をどのように評価しているかについて調査を行う。具体的には, 先行研究で明らかになったExによる英語活動に対する低い評価が, 本研究の調査時期の異なる2回の意識調査でも確認されるか, 調査時期の違いにより英語活動に対する評価がどう変化するか, つまり中学校での英語の学習の進捗が英語活動の評価にどのように影響を与えるかを検証する。また12校の小学校出身者に調査を行うことで, 英語活動の指導内容, 指導方法, 取り組みの違いが英語活動の評価にどう影響を与えるかについて詳しく調べる。本研究では以下のリサーチ・クエスチョンを立てて, Exによる英語活動に対する評価を調査する。

1. Exは英語活動をどのように評価しているのか。先行研究で確認された否定的な評価が, 本研究の調査時期の異なる2回(中1の7月と3月)の意識調査でも裏付けられるのだろうか。また英語活動への評価は, 中学校での英語学習が進むにつれて変化するのか, 中学校での英語の学習の進捗が英語活動の評価に影響を与えるのか。
2. 英語活動の指導内容, 指導方法, 取り組みの違いが, 英語活動の評価にどのように影響を与えるのか。

### 3.2 調査実施時期

第1次調査を平成19年7月、第2次調査を平成20年3月に実施した。

### 3.3 調査対象者

本研究に参加したのは九州北部のK市内にある全6中学に在籍する中学1年生である。第1次調査には1,197名(有効回答数)、第2次調査には1,206名(有効回答数)が参加した。

### 3.4 調査内容

文部科学省が平成16年度に実施した「小学校の英語教育に関する意識調査」(文部科学省, 2004)質問紙(英語が好きか・嫌いか、英語に関する自己評価、学外での英語の学習機会、英語を使ってどんなことをしたいかなどを尋ねている)に、小学校での英語の時間・活動について下記の4項目の質問と「英語を嫌いになった時期はいつごろか? その理由」を加えた。

- 1) 「楽しかったか?」
- 2) 「中学校で役に立っているか?」
- 3) 「もっとたくさんあった方がよかったか?」
- 4) 「アルファベットや文法も勉強しておきたかったか?」

上記4項目と「英語が好きか」に関して、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」、「わからない」の5つの選択肢のうちからそれぞれ1つを選択させた。

質問紙はK市教育委員会から各中学校へ送られ、各学校の裁量で調査が実施された。質問紙への回答は無記名式で行い、実施時間は約15分であった。本研究では調査結果の一部を使用している。

## 4 結果と考察

本研究の研究・クエスチョンは下記の2つであった。

1. Exは英語活動をどのように評価しているのか。先行研究で確認された否定的な評価が、本研究の調査時期の異なる2回(中1の7月と3月)の意識調査でも裏付けられるのだろうか。また英語活動への評価は、中学校での英語学習が進

むにつれて変化するのか、中学校での英語の学習の進行が英語活動の評価に影響を与えるのか。

2. 英語活動の指導内容、指導方法、取り組みの違いが、英語活動の評価にどのように影響を与えるのか。

4.1ではリサーチ・クエスチョンの1について、4.2ではリサーチ・クエスチョンの2について結果と考察を述べる。

### 4.1 リサーチ・クエスチョン 1

#### 4.1.1 7月調査と3月調査の全体の結果

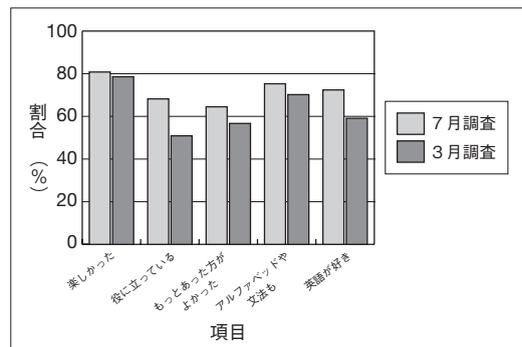
7月(第1次)調査と3月(第2次)調査のA小学校からL小学校まで12校の全体結果を、項目別に表3と図1に示した。「楽しかった」群の生徒は、7月調査でも3月調査でも80%近くに及んでいた。「役に立っている」群の生徒は、7月調査では68%であったが3月調査では51%に下がっていた。「もっとあった方がよかった」群の生徒は、7月調査では65%であったが3月調査では57%に減少した。「アルファベットや文法も勉強しておきたかった」群の生徒の割合は、7月調査では75%であった

■表3: 7月調査と3月調査の結果

N = 1,197名(7月), N = 1,206名(3月)

	7月調査 (%)	3月調査 (%)
楽しかった	995 (81)	957 (79)
役に立っている	835 (68)	618 (51)
もっとあった方がよかった	789 (65)	687 (57)
アルファベットや文法も	922 (75)	850 (70)
英語が好き	911 (72)	739 (59)

▶ 図1: 7月調査と3月調査の結果



が3月調査では70%に減っていた。「英語が好き」群の生徒の割合は7月調査では72%であったが3月調査では59%まで下落した。特に変化が大きかったのは「役に立っている」と「英語が好き」であった。

#### 4.1.2 項目別の考察

##### 4.1.2.1 「楽しかったか？」

「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を「楽しかった」群、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答した生徒を「楽しくなかった」群に分類した。表3と図1から明らかなように、大多数の生徒が7月調査でも3月調査でも、英語活動は「楽しかった」と肯定的に評価している。他の項目と異なり「楽しかった」群の生徒の割合は、調査時期の違いによりほとんど変化がなかった。したがって、中学での英語学習が進んでも、調査参加者のおおむねは英語活動が「楽しかった」と感じていると言える。

北條・松崎(2005)は「楽しさ・うれしさ」について8項目を尋ね、回答の平均は3.4(5点満点)と報告しているが、本研究の結果は彼らの結果を上回り、「楽しさ」で英語活動の評価は高かった。

##### 4.1.2.2 「中学校で役に立っているか？」

「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を「役に立っている」群、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答した生徒を「役に立っていない」群に分類した。表3と図1から明らかなように、「役に立っている」(有用性)に関しては、「役に立っている」と答えた生徒は7月調査で70%を下回り、3月調査ではさらに51%まで落ち込み、「役に立っていない」と答えた生徒43%との差はわずか7%である。したがって、中学校で英語の学習が英語活動の有用性の評価に大きく影響していることを示している。しかしながら、3月調査でも調査参加者の半数は「役に立っている」と答え、「有用性」においても一定の評価を英語活動に与えていると考えられる。

北條・松崎(2005)は有用性について5項目を尋ね、回答の平均は3.0(5点満点)と報告しているが、本研究の結果は彼らの結果を下回る。ただし彼女の調査は12月に行われており、調査時期の違いが結果に影響しているのかもしれない。また、阿部(2007)は有用性について中学1年生では「役立っている」

と答えたのは39%、「あまり役立っていると思わない」が34%、「役立っていない」が12%、「わからない」が15%と報告している。本研究の結果は彼女の結果を上回り、3月調査でも「役に立っている」群が50%を超える。50%の評価をどのように解釈するかは議論が残るが、「有用性」でも英語活動は一応の評価を得ていると言えるのではないだろうか。

##### 4.1.2.3 「もっとたくさんあった方がよかったか？」

「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を「もっとあった方がよかった」群、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答した生徒を「もっとあればよかったとは思わない」群に分類した。表3と図1から明らかなように、「もっとあった方がよかった」群は7月調査で65%から3月調査では57%に減少している。すなわち、中学校で英語の学習が「もっとたくさんあった方がよかったか」の評価に影響していることを示している。有用性が減少したことに伴い、「もっとあった方がよかった」群の生徒も減っていると推測する。

北條・松崎(2005)は「英語活動をもっとやってみたかったか」と尋ね、結果が3.2(5点満点)であったと報告した。本研究は彼らの結果と類似しているが、7月調査で65%、3月調査でも57%が「もっとあった方がよかった」と評価していることから、「もっとあった方がよかった」についても一応の評価を得ていると解釈する。

##### 4.1.2.4 「アルファベットや文法も勉強しておきたかったか？」

「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を「しておきたかった」群、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答した生徒を「しておきたかったとは思わない」群に分類した。表3と図1から明らかなように、「しておきたかった」群は7月調査で75%と比較的高く、3月調査では70%に減少しているものの、調査参加者のかなりの割合が小学校でアルファベットや文法も勉強しておきたかったと答えていることから、中学校で英語の学習が「アルファベットや文法も勉強しておきたかったか」の評価に影響し、調査参加者の多くが英語活動の中で中学校での学習内容の一部前

倒しを希望していることが示された。現時点では、英語活動では音声中心の指導が奨励され、文字や文法の導入は原則として行わないことになっているが、今後小学校で文字や文法の導入を行うかどうかに関しては慎重な検討が必要である。

北條・松崎(2005)は「読み書きを(小学校で)学習したかったか」について4項目を尋ね、回答の平均は3.7(5点満点)であったと報告しているが、本研究は彼らの結果に類似している。

#### 4.1.2.5 「英語が好きか・嫌いか?」(英語好意度)と英語活動に対する評価についての相関

「好き」、「どちらかといえば好き」と答えた生徒を「英語が好き」群、「どちらかといえば嫌い」、「嫌い」と答えた生徒を「英語が嫌い」群にそれぞれ分類した。表3と図1から明らかなように、「英語が好き」群は7月調査で72%と比較的高いが、3月調査では60%を下回っている。

英語好意度と英語活動に対する評価の相関を検討

■表4: 英語好意度と英語活動に対する評価の相関(7月調査)

	spearman 相関係数	有意確率
楽しかった	.258	**
役立っている	.298	**
もっとたくさんあった方がよかった	.283	**
アルファベットや文法も勉強しておきたかった	.104	**

有意確率 \*\*p < .01

■表5: 英語好意度と小学校での英語に対する評価の相関(3月調査)

	spearman 相関係数	有意確率
楽しかった	.183	**
役立っている	.238	**
もっとたくさんあった方がよかった	.231	**
アルファベットや文法も勉強しておきたかった	.133	**

有意確率 \*\*p < .01

した。相関係数は、2つの係数の関連の強さを示す指標であり、数値(相関係数:r)は、 $-1 \leq r \leq 1$ の範囲の値をとり、絶対値が1に近づくほど強い関連を示すものである。7月調査では、それぞれ表4のような値をとり、英語が好きな生徒ほど小学校での英語活動に好評価(楽しかった、役立っている、もっとたくさんあった方がよかった)を示す傾向が若干確認された。しかし、「アルファベットや文法も勉強しておきたかった」とはほとんど関連は示されなかった。3月調査では、それぞれ表5のような値をとり、7月調査で確認されたような関連は見られなかった。

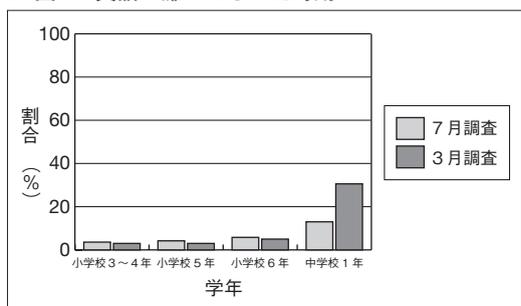
#### 4.1.2.6 英語が嫌いになった時期

調査時期の違いが「英語が嫌いになった時期」に影響を与えるかどうかを調べた。7月と3月の調査で「英語が嫌い」と答えた生徒に対して、英語が嫌いになった時期を「小学校3~4年生」、「小学校5年生」、「小学校6年生」、「中学校1年生」(3月調査では、「中学校1年生1学期」、「中学校1年生2学期」、「中学校1年生3学期」)から選択し回答させた。結果を表6と図2に示す。7月調査では「中学1年生」で嫌いになった生徒が全体の13%と、他の学年よりも圧倒的に高く、全体の傾向として、より後の学年で英語嫌いになるという結果が得られた。3月調査でも、中学1年生で嫌いになった生徒が全

■表6: 英語が嫌いになった時期(7月調査と3月調査)  
N = 1,197名(7月), N = 1,206名(3月)

	小学校3~4年(%)	小学校5年(%)	小学校6年(%)	中学校1年(%)
7月調査	42(3.6)	50(4.2)	69(5.8)	155(13.0)
3月調査	30(3.0)	35(3.0)	56(5.0)	367(31.0)

▶ 図2: 英語が嫌いになった時期



体の31%で、他の学年よりも圧倒的に高かった。それに伴い、より早期に英語嫌いになったとする生徒の割合は減っていた。中学1年生で嫌いになった生徒31%のうち、1学期で嫌いになった生徒が全体の17%と最も高く、2学期で嫌いになった生徒は12%、3学期で嫌いになった生徒は2%であった。

#### 4.1.3 リサーチ・クエスチョン 1 に対する考察のまとめ

本研究の調査参加者は、7月の調査では、英語活動を「楽しかった」、「役に立った」、「もっとあった方がよかった」、「英語が好き」と肯定的に評価した。中学校での英語学習が進むにつれて「役に立った」と思わなくなる傾向があるものの、半数以上は3月調査でも「役に立った」、「もっとあった方がよかった」と答えている。したがって、本研究ではExが英語活動を肯定的に評価していると結論する。また、アルファベットや文法を（小学校）で学ぶことへの要望も強いことがわかった。

中学校での英語の学習が進んでも、中学1年生は英語活動に対する肯定的な評価を維持していた。評価項目の中で、中学校の英語学習の進行は、英語活動の「楽しさ」の評価にはあまり影響しないが、「有用性」や「学習内容」の評価にはかなり影響を与えていることが示された。

また、本研究の結果を分析する中で、調査参加者が、英語活動と中学校の英語を区別している様子が浮き彫りになった。彼らは当初は英語活動と中学校の英語を1つの流れと認識していたが、中学校での英語の学習が進むにつれ、英語活動と中学校の英語を切り離して、別のものであるという認識に切り替えたと推測できる。その背景は、「英語が嫌い」な生徒が増えているが、「楽しかった」とする割合はほとんど変化していなかったこと、その一方で「役に立った」、「もっとあった方がよかった」の割合が大幅に減少していたことである。また英語好意度と英語活動に対する評価の相関が、7月調査では中程度の正の相関が見られていたが、3月調査では互いに強い相関は見られなかったことから、調査参加者が英語活動と中学校の英語を区別している様子がうかがえる。つまり中学1年生の1学期の英語の内容は英語活動の内容と重複するものも多く、また小学校時代の肯定的な印象が中学校での英語の授業の評価に肯定的な影響を及ぼしていたが、授業が進む

につれ、英語活動と中学校の英語が切り離され、現在の印象がそのまま英語の好意度に影響を及ぼすようになっていないのだろうか。

以上をまとめると、本研究の調査結果から、Exが英語活動に一定の評価を与えていること、英語活動の評価において、中学校での英語学習の進行により「楽しさ」は影響を受けないが、「有用性」や「学習内容」は影響を受けること、英語活動と中学校の英語を区別する傾向が示唆された。

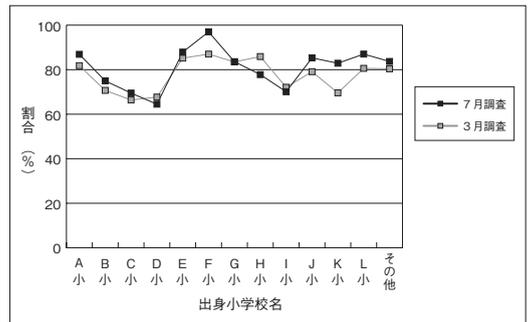
## 4.2 リサーチ・クエスチョン 2

### 4.2.1 7月調査と3月調査の項目別・出身小学校別の結果

#### 4.2.1.1 「楽しかったか？」

7月調査と3月調査に関して、出身小学校別に「楽しかった」群に属する生徒を図3に示した。出身小学校別に見ると「楽しかった」群に属する生徒は、どの小学校でも調査間で大きな変化はなかったが、全体的に3月調査で少し減少する傾向が見られた。特にF小出身者では10%、K小出身者では13%「楽しかった」群の割合が減っていた。それに対してH小出身者では「楽しかった」群が8%増えていた。

▶ 図3：「楽しかった」の変化

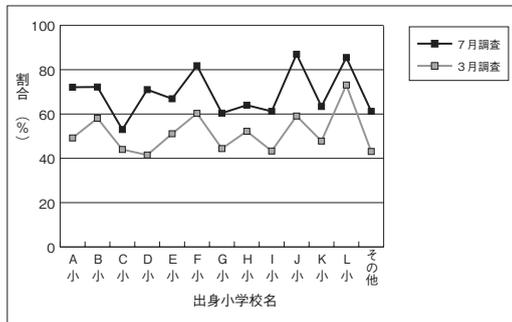


#### 4.2.1.2 「中学校で役に立っているか？」

7月調査と3月調査に関して、出身小学校別に「役に立っている」群に属する生徒を図4に示した。出身小学校別に見ると「役に立っている」群に属する生徒は、3月調査において全小学校で大きく減少した。特にJ小出身者では28%減少、D小出身者では30%減少し41%まで下落した。3月調査でA、C、D、G、I、K小出身者では「役に立っている」群が

50%以下まで落ち込んでいる。それに対してL小出身者は3月調査で「役に立っている」群が12%減少したものの、3月調査でも73%が「役に立っている」と答えている。

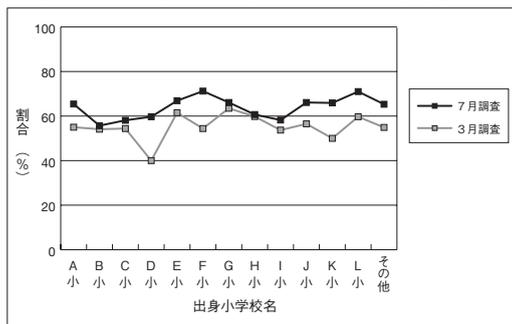
▶ 図4：「役に立っている」の変化



#### 4.2.1.3 「もっとたくさんあった方がよかったか？」

7月調査と3月調査に関して、出身小学校別に「もっとあった方がよかった」群に属する生徒を図5に示した。小学校別に見ると「もっとあった方がよかった」群に属する生徒の変化の度合いには、ばらつきがあった。全体的には、「もっとあった方がよかった」群に属する生徒は3月調査で減少していた。F小出身者では17%、K小出身者では16%減少し、特にD小出身者では「もっとあった方がよかった」群が20%減少し、40%まで下落した。

▶ 図5：「もっとあった方がよかった」の変化

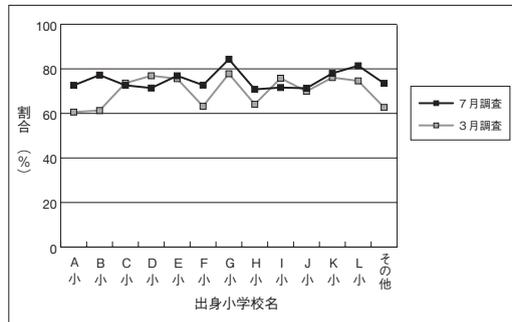


#### 4.2.1.4 「アルファベットや文法も勉強しておきたかったか？」

7月調査と3月調査に関して、出身小学校別に「しておきたかった」群に属する生徒を図6に示した。小学校別に見ると「しておきたかった」群に属する生徒の変化の度合いには、ばらつきがあった。

する生徒の変化の度合いには、ばらつきがあった。B小出身者では16%減少しているが、D小出身者では、「しておきたかった」群に属する生徒の割合が3月調査で5.5%増加し、76.9%が「アルファベットや文法も勉強しておきたかった」と答えている。

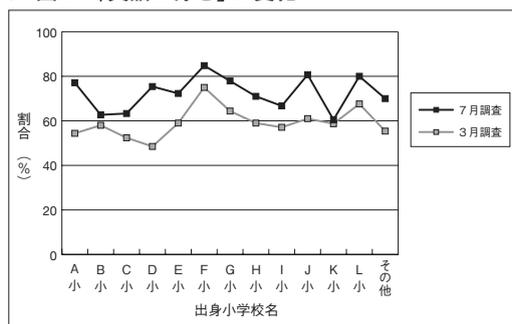
▶ 図6：「しておきたかった」の変化



#### 4.2.1.5 英語好意度

7月調査と3月調査に関して、出身小学校別に「英語が好き」群に属する生徒を図7に示した。小学校別に見ると「英語が好き」群に属する生徒の割合の変化の度合いには、ばらつきが見られた。A小出身者では23%、J小出身者では20%減少しており、特にD小出身者では、「英語が好き」群に属する生徒の割合が3月調査で27%減少し、「英語が好き」群は48.5%まで下落した。

▶ 図7：「英語が好き」の変化

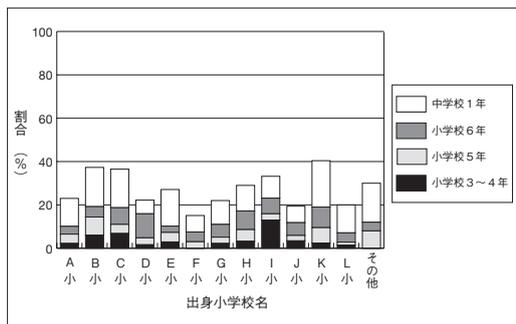


#### 4.2.1.6 英語が嫌いになった時期

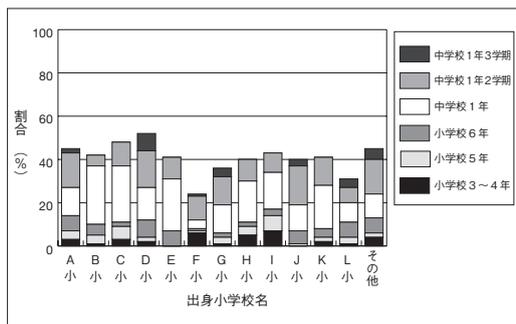
7月調査(図8)で「英語が嫌いになった時期」を小学校別に検討したところ、ほとんどの学校で学年が上がるにつれて割合が多くなり、中学1年生で最も高いという全体の傾向と一致する結果が得られたが、I小出身者は小学3～4年で英語が嫌いにな

なった生徒が最も多く（13%）、D小出身者は小学6年が最も多い（11%）という、全体とは異なる結果が得られた。3月調査では、ほとんどの学校で学年が上がるにつれて割合が多くなり、中学1年生で最も高いという全体と同一の傾向が得られた（図9）。C小出身者やD小出身者は、中学1年生で英語が嫌いになった生徒の割合が多いのに対して、F小出身者やL小出身者は中学1年生で英語嫌いになった生徒の割合が、比較的少ない。さらに、F小出身者で英語が嫌いな生徒は、3月時点で全体の25%で、他の小学校出身者に比べるとその割合はかなり少なかった。

▶ 図8：出身小学校別英語嫌いになった時期（7月調査）



▶ 図9：出身小学校別英語嫌いになった時期（3月調査）



#### 4.2.2 リサーチ・クエスチョン2に対する考察のまとめ

出身小学校別に結果を概観すると、D小では否定的な英語活動への評価が行われているのに対して、F小、J小、L小ではかなり高く英語活動が評価されており、英語活動の指導内容、指導方法、取り組みの違いが英語活動の評価に大きく影響しているこ

とが示唆された。また英語活動の違いは「英語嫌いになる時期」にも影響していた（図8、9）。本研究では、各小学校での英語活動の実施状況（指導内容、指導体制、時間数、取り組みなど）に関する調査は実施しなかったため、実際にどのような要因がばらつきの原因になっているのかは分析できなかった。ただし、K市では全小学校に対して高学年で週1時間（年間35時間）の英語活動を行うよう教育委員会が奨励しており、K市としての基底カリキュラムを持ち、全小学校に同一にALTやJETも派遣していることから、ある一定の環境や条件整備は教育委員会によって確保されている。したがって、調査参加者による英語活動の評価は、それほど学校間のばらつきがないだろうというのが、調査前の予測であった。それにもかかわらず、学校間でかなり大きな格差が確認されたことは、英語活動の違いが、いかに大きくExによる英語活動の評価に影響を与えることを示唆している。「英語活動」とひとくくりを考えるのではなく、それぞれの英語活動に対して、詳細に評価が行われるべきであり、よりよい実践のためにその評価が活用することが大切である。

橋口（2006）は、パイオニア校での否定的な評価をもとに、英語活動の指導内容・方法・取り組みの違いが英語活動の評価に影響することを明らかにしたが、本研究ではL小がK市の英語活動のパイオニア校であるにもかかわらず、12校中最も高い評価を得ており、パイオニア校であっても英語活動の内容の違いにより評価は異なる。リサーチ・クエスチョン2に対しては、「英語活動の違いが英語活動の評価に大きく影響を与える」とまとめられよう。

## 5 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題について言及する。第1に本研究の調査時期である。7月に第1回の調査を行ったが、英語活動を振り返り評価する際に、英語活動だけでなく中学校英語に起因する回答の混同やゆがみがあったのではないかと推測される。英語活動の評価についての調査は、小学校6年生の3月または中学1年生の4月に第1回調査が実施され、変化を検証するために中学校1年生の3学期に第2回調査を実施し、調査間の結果が比較されるべきで

あった。第2にサンプルの数や抽出方法である。本研究では、K市の全6中学校に在籍する中学1年生に調査への参加を求めたが、本研究の結論を一般化するにはさらに別のサンプルでの研究が必要である。第3に各小学校での英語活動の実施状況に関する調査を実施しなかったため、英語活動のどのような違いが具体的にどう英語活動に対する評価に影響するかについて分析できなかった。第4に本研究は中学校1年生の1学期と3学期での英語活動への評価についての調査研究であり、中学2年生以降英語活動への評価がどう変化するかについては調査できなかった。今後はこれらの限界と課題に取り組むために、新たな調査計画をもとに再度調査を行い、英語活動経験者が英語活動をどのように評価するかについて研究していきたい。

以上のような限界はあるが、本研究は小学校での英語活動経験者による英語活動の評価と、中学校での英語学習の進行に伴う英語活動に対する評価の変化、英語活動の指導内容・方法・取り組みの違いによる英語活動の評価への影響を調査した研究としては、価値ある研究であり、今後の英語活動の展開に何らかの示唆を与えられよう。

樋口他(2007)、静(2007)が、効果に基づく英語活動の評価研究の分野で、英語活動の一定の評価を確立したことに加え、本研究が英語活動経験者による英語活動に対する評価研究の分野で、彼らの英

語活動に対する肯定的な評価を実証したことの意義は大きい。すなわち、公立小学校への英語教育導入の「第2ステージ」において、英語活動の基盤が確立されたと解釈できよう。文部科学省は、英語活動に関して、新学習指導要領移行期間中も各校の判断で実施可能(最大年35時間)とすると発表した(文部科学省, 2008d)。今後さまざまな観点から英語活動に対する評価が行われ、第3ステージ、第4ステージへとつなげていくことが大切である。

## 謝 辞

最後に本研究の機会を与えてくださった(財)日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方、とりわけ貴重なご助言・ご指導をいただいた大友賢二先生に心より感謝を申し上げます。また、本研究に参加してくださったK市の中学1年生の皆様、ご協力いただいた各中学校の先生方、K市教育委員会にも心よりお礼申し上げます。さらに、調査の実施にご尽力いただき、また本研究へのアドバイスをくださった、共同研究者の福岡教育大学の中島亨准教授、いつも寛容な態度で励ましてくださった福岡教育大学の池浦貞彦名誉教授と高梨芳郎教授にも感謝の意を表します。なお、本研究のデータ分析に関しては、福岡教育大学の学校教育大学院生の中島良さんにご協力いただきました。この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

## 参考文献(\*は引用文献)

- \*阿部笑子.(2007).「英語科における小・中連携を図るための課題と方策—青森市浪岡地区における英語学習調査から—」.『弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要』第5号, 31-42.
- \*バトラー後藤裕子.(2005).『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言』.東京:三省堂.
- \*バトラー後藤裕子・武内麻子.(2006a).「小学校英語活動における指導とコミュニケーション能力—児童英検シルバーによる調査—」.STEP BULLETIN, vol.18, 248-263.
- \*バトラー後藤裕子・武内麻子.(2006b).「小学校英語活動における評価:児童英検(BRONZE)を使った試み」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第25号, 1-15.
- \*ベネッセ教育研究開発センター.(2007).「小学校英語に対する保護者の意識—英語教育必修化の流れの中で—」.  
[http://benesse.jp/berd/center/open/berd/2007/10/pdf/10berd\\_10.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/berd/2007/10/pdf/10berd_10.pdf).(2007年12月27日取得).

- \*Cameron, L.(2001). *Teaching language to young learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \*中央教育研究所.(2002).『小学生の英語の学習状況と理解力の調査研究:研究報告No.61』.東京:中央教育研究所.
- \*樋口浩明.(2006).「中学校英語科へ効果的につなげる小学校英語活動—中学校入学時の英語に対する実態調査から—」.『小学校英語教育学会』第7号, 25-30.
- \*橋本秀徳.(2005).「小学校英語活動が中学校英語学習に与える影響」.『中国四国教育学会教育研究紀要』第51巻, 476-481.
- \*樋口忠彦・北村豊太郎・守屋雅博・三浦一郎・中山兼芳.(1986).「早期英語学習経験者の追跡調査—第1報」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第5号, 49-67.
- \*樋口忠彦・北村豊太郎・守屋雅博・三浦一郎・中山兼芳・国方太司.(1987).「早期英語学習経験者の追跡調査—第II報」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第6号, 3-21.

- \* 樋口忠彦・北村豊太郎・守屋雅博・三浦一朗・中山兼芳・國方太司.(1988).「早期英語学習経験者の追跡調査—第Ⅲ報」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第7号, 43-63.
- \* 樋口忠彦・三浦一朗・國方太司・守屋雅博・北村豊太郎・中山兼芳(1989).「早期英語学習経験者の追跡調査—第Ⅳ報」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第8号, 3-14.
- \* 樋口忠彦・國方太司・三浦一朗・北村豊太郎・中本幹子・守屋雅博.(1994).「早期英語学習が学習者の英語および外国語学習における態度と動機に及ぼす影響」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第13号, 35-48.
- \* 樋口忠彦・大村吉弘・田邊義隆・國方太司・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子・篠崎雄子・植松茂男・三上明洋.(2007).「小学校英語学習経験者の追跡調査と小・中学校英語教育への示唆」.『近畿大学語学教育部紀要』第7号, 123-180.
- \* 北條礼子・松崎邦守.(2003).「小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査：山梨県I中学校の場合」.『上越教育大学研究紀要』第23号, 1-10.
- \* 北條礼子・松崎邦守.(2005).「公立小学校における英語活動に関する意識調査：千葉県沼南町の小学6年生児童・中学1,2年生に対するアンケート調査をとおして」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第24号, 71-91.
- \* 石濱博之.(2003).「英語活動を体験した児童の聴解力の伸びに関する事例研究」.『小学校英語教育学会紀要』第4号, 9-15.
- \* Kajiro T.(2005). A consideration on the effect of studying English in elementary school in Japan.『関東甲信越英語教育学会研究紀要』19, 91-102.
- \* Kajiro T.(2007). Does English instruction before junior high school affect development of students' pronunciation skills? *Annual Review of English Language Education in Japan*, 18, 101-110.
- \* 神白哲史・太田洋.(2005). The Efficacy of English Education before Junior High School I.『英語授業研究会紀要』14, 3-15.
- \* 金谷憲・太田洋・神白哲史.(2005).「小学校での英語学習経験は中学で見てわかるか」.『英語教育増刊号』, 73-78.
- \* 勝山ひとみ・西垣知佳子・汪金芳.(2006).「児童の英語力テストの結果に見る小学校英語活動の効果」.『関東甲信越英語教育学会研究紀要』第20号, 113-124.
- \* 松川禮子.(1998).『小学校に英語がやってきた』.東京：アプリコット.
- \* 松川禮子.(2004).『明日の小学校英語教育を拓く』.東京：アプリコット.
- \* 恵達二郎・横川博一・三浦一朗.(1996).「早期英語学習経験者の中・高における成績」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第15号, 27-35.
- \* 恵達二郎・横川博一・三浦一朗.(1997).「早期英語教育学習経験者の心的辞書に関する一考察」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第16号, 1-10.
- \* 三尾弘子・橘堂弘文.(2004).「生津小学校における英語の効果に関する調査：異文化を受け入れる態度を実態調査から捉える」.『日本児童英語教育学会研究紀要』第23号, 77-92.
- \* 文部科学省.(2004).「小学校の英語教育に関する意識調査報告書」.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/015/05032201/004/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/015/05032201/004/001.htm). (2006年4月23日取得).
- \* 文部科学省.(2008a).「小学校学習指導要領改訂案」.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/080216/002.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/080216/002.pdf). (2008年2月16日取得).
- \* 文部科学省.(2008b).「平成19年度英語活動実施状況調査」.  
<http://www.nicer.go.jp/lom/data/contents/bgj/2008032504030.pdf>. (2008年4月8日取得).
- \* 文部科学省.(2008c).中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(答申).  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf). (2008年1月19日取得).
- \* 文部科学省.(2008d).「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の一部を改正する省令案等について(概要)」.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/080424/003.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/080424/003.pdf). (2008年4月29日取得).
- \* Shinohara Y.(1999). Effects of elementary English instruction on pronunciation accuracy.『日本児童英語教育学会研究紀要』第18号, 1-21.
- \* 白畑知彦.(2002).「研究開発学校で英語に接した児童の英語能力調査」.『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』33, 195-215.
- \* 白畑知彦.(2004).「外国語学習環境の事例」.『英語習得の「常識」「非常識」』.pp.99-101.東京：大修館書店.
- \* 白畑知彦.(2007).「言語習得から見た小中連携」.『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』.松川禮子・大下邦幸編著.(pp.64-76).東京：高陵社書店.
- \* 静哲人.(2007).「小学校時代の英語学習が高校時代の英語力及び動機付けに及ぼす影響について」.『連携のもとで行う英語教育』.64-76.  
<http://www.osaka-c.ed.jp/nagano/kikaku/selhi/selhire.pdf>. (2007年7月27日取得).
- \* 高田智子.(2003).「早期英語教育経験者と未経験者の中間言語の分析—中学入門期のつまずきの原因を比較する—」. *STEP BULLETIN*, vol.15, 159-170.
- \* Takada, T.(2004). The listening proficiency elementary school (ES) and junior high school (JHS) intend to develop: What teachers should know to bridge the gap between ES and JHS programs. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 15, 109-118.
- \* 高田智子.(2005a).「小学校英語学習経験者の中学入学以降の文法習得」.『関東甲信越英語教育学会紀要』

第19号, 35-46.

- \* Takada, T. (2005b). Does teaching reading and writing in elementary school make a difference in junior high school language development? *Annual Review of English Language Education in Japan*, 16, 181-190.
- \* Takagi, A. (2003a). The effects of language instruction at an early stage on junior high school, high school, and university students' motivation towards learning English. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 14, 81-90.
- \* Takagi, A. (2003b). The effects of early childhood language learning experience on motivation towards learning English: A survey of public junior high school students. 『日本児童英語教育学会研究

紀要』第22号, 47-71.

- \* 高松憲子. (2002). 「小学校での英語教育をふまえた中学校1年生でのスピーキング指導と評価」. *STEP BULLETIN*, vol.14, 130-141.
- \* 筑波大学附属中学校研究部. (2004). 「英語入門期指導を改めて考察する～中学校入学以前の英語体験を探りながら～」. 『第32回研究協議会発表要項』. 95-114.
- \* Watanabe, T. (2007). Psychological effects of learning English at elementary school: From a follow-up study at the junior high level. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 18, 231-240.
- \* 山森光陽. (2004). 「中学校1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」. 『教育心理学研究』第52号, 71-82.